

2001年10月例会レジュメ

10-1 廣江尚成（機械）

ブラジルでの企業指導

（財）海外貿易開発協会の依頼でブラジルの小企業5社を1年間、指導されたものである。サンパウロ市の西方約120kmのインディアトゥーバ市とサウト市にある5社は、自動車、農業用トラクター、建設車輛などの、部品の機械加工とプレス・塗装を行う下請け部品メーカーである。要請事項は現場トラブルの解消や段取り替えの改善等により、生産性向上目標30%の達成であった。しかし診断では、企業としての基礎から技術面を含む企業経営全般に及ぶ必要があった。先ず、改善の環境づくりから始め、問題を現場・管理・経営に大別し、各社の能力に応じて段階的に指導された。その結果、現場小グループによる自発的改善活動が定着し、次に管理体制の整備に取り組み、各社とも目に見える成果を示し始めた。更に、管理水準の向上や生き残りのための経営計画の立案にも取り組みつつある。5社共同行事として見学会や成果発表会を開催し、お互いの啓蒙の場を積極的に活用された。最後に海外指導における留意点にも触れ、今後、新たに海外で活躍しようとする技術士への参考とされた。

10-2 齋藤貞之（機械）

物の価値そして人の命の価値

異色の題材であった。経済状況をコントロールする手法の殆ど全ては、現在、ケインズの経済理論に基礎を置いている。それらの手法が今や効果を出しにくい状況を迎えている。このため我々は、今何をなすべきか戸惑っていて、有効な策を見つけられないでいる。ここで我々は初心に戻り、人間の経済活動の基礎である労働価値論、すなわちカール・マルクスの「資本論」やアダム・スミスの「国富論」を見直し、我々の行動は如何にあるべきかを考える‘きっかけ’にできないかを問い掛けられたのである。講演では、先ずケインズの「雇用・利子および貨幣の一般理論」による手法の問題点を論じ、「資本論」を社会科学と捉えて「全ての価値は労働から生ずる」ことを確認し、「労働価値論」の正当性を論じられた。次に「労働価値論」の系譜を考え、ここで何を学ぶべきかを論じ、最後に種々の問題のうち、例として国際間の労働の価値の格差の問題を取り上げ、命の価値の格差まで考えなければならない点を指摘された。

（中島菊生 記）